

読み継がれる *De nøgne træer*
-理想主義への挑戦と普遍性-

デンマーク語専攻 平井柚衣

目次

1. はじめに
 2. 作家紹介
 - 2.1. 作家略歴
 - 2.2. Holger Mikkelsen シリーズ
 3. 作品紹介
 - 3.1. あらすじ
 - 3.2. 第二次世界大戦後の文学界
 4. 作品分析
 - 4.1. 英雄視された抵抗運動
 - 4.2. 登場人物が内包する多面性
 - 4.2.1. 語り手：ホルガ
 - 4.2.2. 抵抗運動のメンバー：クレスチャン，ヤコブ，リーオ
 - 4.2.3. 幼なじみ：ケル
 - 4.2.4. クレスチャンの妻：ゲアダ
 5. “Forsvar for prosaen” 「散文の擁護」との関わり
 6. まとめ
- 使用テキスト
参考文献
インターネット上の資料

要約

デンマークの作家テーイ・スコウーハンスン(Tage Skou-Hansen, 1925-2015)は戦後の実存主義作家, 1970年代のネオリアリズム散文作家として知られている。学生時代にはドイツ軍に対する抵抗運動に参加した経験を持つなど, 彼の作品は自身の経験を背景として描かれているものが多く存在する。その中でもデビュー作 *De nøgne træer*『裸の木』は世界十カ国語に翻訳されているほか, 高等学校ではデンマーク語のカリキュラムの一部として扱われていたり, 大学の授業でも取り上げられたりしている。また 2007 年には小説の出版 50 周年を記念して文学教授ハンス・ヘアテル(Hans Hertel)等による寄稿雑誌 *Kritik*『クリティック』が出版されるなど, 今なお“新しい古典”として読み継がれている。しかしながら, スコウーハンスンの作品は同ジャンルで活躍した他の作家らと比べるとデンマーク国内における研究が多くは見られない。そこで本稿では, 小説を通してスコウーハンスンが当時の世相をどのように読み解き, またその時代を描いた一つの作品が社会に対してどのような影響をもたらしているのかという点について考察する。

第二章ではスコウーハンスンに焦点を当てて彼の作品や作風を紹介する。作者はデビュー作で創造した語り手を後の作品においても用いており, また作品のテーマは自身の経験をもとにして社会的・政治的意見押し出したものが存在することを指摘した。

第三章では本稿で扱う『裸の木』のあらすじを紹介するとともに, それが執筆, そして出版された当時のデンマーク文学界の潮流を加えて考察した。この小説は, 1943年12月以降のドイツ軍占領下デンマークにおける抵抗運動グループを描いた物語であるが, テーマは戦争や男女の不倫, 自己形成など多岐にわたる。また出版された当初は第二次世界大戦からわずか十年程であり, 社会全体として戦争への反省から個人の思想や芸術といったものに価値があるとされていた。その価値観の普及を担ったものの一つに文学雑誌 *Heretica*『異端』があり, スコウーハンスンもこのサークルのメンバーに属していた。

第四章では, 物語の展開と史実を照らし合わせることで, 歴史的整合性や小説の雰囲気进行分析するとともに, 登場人物の名前の由来

を考察の起点として人物分析を行なった。本作品はデンマークにおける抵抗運動の史実に基づいて詳細に描かれており、戦後デンマークで抵抗運動が政治利用されたという文脈を考慮すると、登場人物の追体験を通して抵抗者たちの英雄化を補強しているということもできると指摘した。また物語に登場する人物の名前は、実在した歴史上の人物や神話に登場する人物を象徴している。しかし、それらの神格化された象徴人物たちを自己迷走や思想的偏向といった側面を押し出した登場人物に描き変えることで人間の不完全さを描いたと考察した。

第五章では、スコウーハンスンがデビュー作を発表する以前に文学雑誌『異端』に投稿したエッセイ“Forsvar for prosaen”「散文の擁護」をサブテキストとして扱いながら、そこに現れる作家の思想哲学と『裸の木』との関連を分析した。スコウーハンスンは、文化危機は過ぎ去ったという1950年前後の社会風潮に対して、我々の欲望が世界大戦をもたらしたという事実と向き合っていく必要があると説く。そのためには、現実から目を逸らして個人の内面やユートピア的な芸術に目を向ける韻文に焦点を合わせるのではなく、周囲との関わりの中で生まれる現実を観察する散文を尊重すべきだと主張する。この小説は、スコウーハンスン自身が観察者となり、多様な登場人物を様々な視点から描いたものである。また、作者が男性主体の抵抗運動という物語に女性の存在を色濃く描いている点についても言及した。

第六章で本稿全体のまとめを述べた。この作品は硬派な政治的見解を押し出した文学としての側面を持ちながらも、男女の不倫や若者が抱える精神的な葛藤といった日常風景をも描いており、その多様性こそが作者が見た現実社会だったと言える。作者が本作品を描いた時代にはキリスト教的思想や芸術崇拝といった前世代における普遍的な価値が隆盛していた。その中で当時の若者が旧世代の価値観に縛られることなく、新たな価値を創造しつつアイデンティティを形成する過程を描いたことも指摘した。これはグローバル化やSNSの普及に伴い、外部に目を向けざるを得ないながらも内部(自己)に確固たる価値を見出すことが難しくなった現代人にとって、今一度自己と対峙する機会となっているという点で普遍的価値があると結論づけた。